

電気釜がふつふつと音をたてて、部屋中にごはんのいい匂いが漂ってくる。白い大皿が3枚テーブルに並ぶ。パチッとスイッチが切れる。シャッシャッ……ご飯の混ざる音。ねずみ色のセーターの袖がまくられ大きな手がにぎり始める。白いまるさんかくのおむすびが続々と皿に並ぶ。

保育園の給食室の消毒の日、遠足の日、運動会の日、弁当はいつも父が作ってくれた。おむすび3つとしょっぱい玉子焼き。具はシャケ、たらこ、おかかの3種類。生まれたてのまるさんかくは海苔が巻き付けられてちょっと強そうに見える。アルミホイルでさらに武装が施される。弁当箱は銀色の世界。ちょっとだけ自分も強くなれる気がした。

なんの行事だったか小学3年の頃、自分が書いた作文を読み上げる時間があった。朝、目覚めたところからその行事が楽しみでわくわくした思いを綴り「お父さんがお弁当を作ってくれました」と読もうとして躊躇した。とっさに「恥ずかしい!」と思ったのだ。昭和50年代、私の住む地域で父親がお弁当を作る家庭はなかったと思う。急いで「オカアサン」と言いかえた、つもりがどういいうわけか「オトウサン」と発声していた。クラスがざわめいた。「え? おとうさん!? おかあさんじゃないの? へんなの!」子どもたちは火が付いたように発言する。仲良しのカオルちゃんなどは「言い間違えたんだよね?」と真面目な顔で耳打ちしてくれる。いわれのない裏切りが発覚したような思いだった。公開処刑の時間はとてつもなく長く、その後の記憶はない。あれがたぶん自分の「武装」が始まった瞬間だった。

父親が食事の支度をするのは私の家では普通のことだった。父は北海道の貧乏育ちの三男坊で10歳の頃から家業の新聞配達を手伝い、家族全員の弁当を作る働き者だったそうだ。勉強は得意だったから現役で国立大学に入れたものの、学生時代は麻雀とパチンコにあけくれていたらしい。就職難の時代でようやく入れた会社も暇すぎて一日雀卓を囲んでいたら1年で倒産してしまった。そこで一念発起し司法試験に挑むことに決めた。友人のついででほとんど会ったこともない教授の家に行った。刑事訴訟法の先生は自宅で学生たちに司法試験の指導をするゼミを開いていた。先生も奥様もとても可愛がってくれて父もこまごまとした雑用を手伝ったりしながら熱心に通い、見事2年で合格した。弁護士として仕事を始めてからどういう成り行きだったのか先生のお嬢さんと結婚した。9歳下の彼女はとても美しくピアノで海外留学するほどの才媛だった。大切なお嬢様に家事などさせるわけがない。私が物心ついたときから父はとにかく母にやさしかった。洗濯や掃除は一日おきに紹介所のおばちゃんがやってきて担当していた。もちろん食事は父の担当。

アルミの武装を解くと海苔の香ばしい香りがする。父の握るまるさんかくのおむすびは絶品だった。そのうち父がとても忙しくなり、いや、クラスメイトの視線が気になったからなのか、私は自分で弁当を作るようになった。中学3年の夏、地方の町で新しい生活を始めていた母のもとに私が呼ばれ、父とはほとんど会わなくなった。父にも新しい家庭ができた。そして私にも……。

ある日父がぷらっと会いに来た。「小学3年の娘のなわとびを見ていたらね、なんだかもう十分満足だと思ったんだ」ととても穏やかな声だった。それから2週間後、ふいに旅立ってしまった。友達の家で碁を打っている途中に心筋梗塞を起こしたということだった。料理男子、イクメン、遊び人、家を3軒も建て訴訟にたくさん勝ち、胃の大手術をして、家庭を2度も作って……。あれから22年。武装したまるさんかくが無性に恋しい。